

海を渡る『はだしのゲン』

— その英語訳とハワイにおける受容

莊 中 孝 之

はじめに

原爆を描いたマンガとして知られる中沢啓治の『はだしのゲン』（1973–85年、以下『ゲン』と略記）は、2021年10月の時点において世界26ヶ国の言語に翻訳されている。近年の英米圏におけるその受容については Roger Sabin の包括的な研究（2006）がある。¹ これは2000年代初頭までの英米圏での動向を概括する、綿密な調査と鋭利な分析に裏打ちされた優れたものである。しかしそれから10年以上経過した今、よりローカルで具体的な受容を調べることで見えてくるものもあるのではないだろうか。実際にどこで、どれほど、どのような人たちに、どのように読まれているのだろうか。たとえば太平洋戦争の発端となった、真珠湾攻撃が行われたハワイではどうだろうか。日系人を含め数多くの民族が共存するこの島は、原爆や日本の戦争責任の問題を考えるうえで、非常に複雑で興味深い場所である。そこで『ゲン』はどのように受け止められているのだろうか。

1. 海を渡る準備—翻訳の過程とその問題

まずハワイでの調査に先立ち、日本で『ゲン』を英語に翻訳した金沢の市民グループ、「プロジェクト・ゲン」の代表、浅妻南海江氏を取材した。同グループはもともと、平和活動をしていた大嶋賢洋氏が1977年に数名の仲間と立ち上げたもので、1978年には『はだしのゲン』第1巻を翻訳出版している。その後初代グループは4巻まで刊行した。そしてチェルノブイリ原発事故で被災したウクライナ人女性と、金沢の小学生との文通の翻訳を担当して

いた浅妻氏が原爆について伝えたいと考え、『ゲン』をロシア語に訳すために「プロジェクト・ゲン ロシア班」の名で活動を始め、2001年に7年がかりでロシア語版を完成させた。2代目代表となった浅妻氏はその後、完訳版がなかった英語版全10巻を、約10年かけて2009年に出版している。英語版はメンバーの一人で、現代表の西多喜代子氏を中心に、数名の小グループで作業が進められた。メンバー間で分担して、ある程度訳したところで同グループ創立当初からの協力者、アメリカ人の Alan Gleason 氏に英文校正をしてもらうというように進められたそうである。そのあとにはスキャナーで原作を読み取り、縦書きの日本語部分を消して、そこに横書きで英訳を挿入するという作業が待っているが、そこには大変な苦労があったようである。

まず絵に書き込まれた擬音語や擬態語の問題である。これらの多さは日本語マンガの特徴でもあるが、翻訳においてはその扱いはとりわけ難しいものとなる。また日本語の擬音語や擬態語を消去する際に、その下の絵も場合によっては消さざるを得ない。そこで消した下の絵を自分たちでもう一度書いて、対応する英語のオノマトペを書くことになる。日本語の擬音語や擬態語に対応する英語のオノマトペが比較的容易に見つかる場合はまだよい。例えば原爆投下直前のゲンの家族の様子を描くシーンでは、朝の8時前をさす時計が「カチッ、カチッ」と音を立てているが（図1）、これは英語で“tick tock”と表現されている（図2）。ただしここでは原作の擬音語を消す際に、背景の線も同時に処理されている点に注意したい。

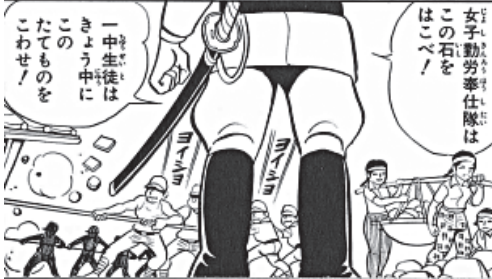


(図1 『ゲン』 1巻、248頁)

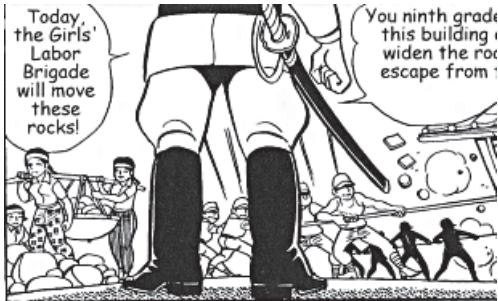


(図2 Gen Vol.1, p.248)

その4コマあとの勤労奉仕隊が建物を取り壊している場面に描かれる「ヨイショ」という縦書きの掛け声(図3)は、「yo-ho」などの訳語が考えられるが、横書きの英語で書くスペースがないためか、カットされている(図4)。



(図3 『ゲン』 1巻、248頁)

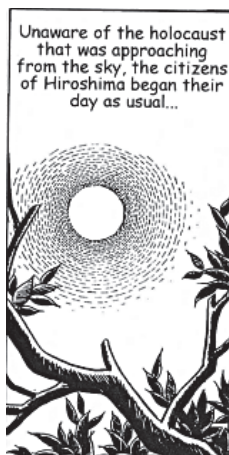


(図4 Gen Vol.1, p.248)

またその次の場面ではセミの鳴き声と思しき「ミーン、ミーン、ミーン、ジジー」という擬音語もカットされている。これは日本では通常夏の盛りに「ミーン、ミーン」という鳴き声を聴けばセミとわかるが、他の国では共通の認識が存在しないし、そもそもこの音自体を英語で表現しにくいということが考えられるだろう(図5, 6)。



(図5 『ゲン』 1巻、249頁)



(図6 Gen Vol.1, p.249)

また基本的に右から左に向かって縦に読む日本語のマンガに対して、英語のマンガは左から右に向かって横に読む。そのため全体に絵自体も反転させている。² たえば先ほどと同じ場面で見ると、原作ではゲンの母親の「英子もはよう学校へ行きんさい」というセリフがコマの右にあり、そのあと娘の英子の「うん ちょっとしらべものがあるの」という言葉が同じコマの左に続く (図7)。



(図7 『ゲン』 1巻、249頁)

しかしこのままの絵で英語のセリフを入れると、左から右に読む英語版では会話の流れが逆になってしまう。そのために絵自体を反転させているのであるが（図8）、それによってまた新たな問題が発生している。



（図8 Gen Vol.1, p.249）

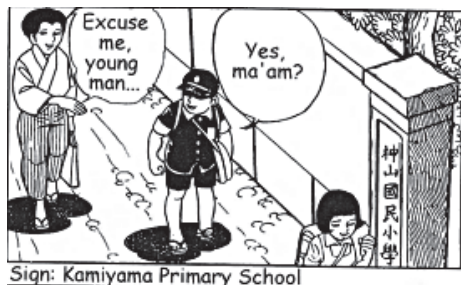
その次のページでゲンが小学校の校門の前で、女性に「ちょっと」と呼び止められるシーンがある。ここでは学校の門に「神山国民小学校」という文字が見られる（図9）。



（図9 『ゲン』 1巻、249頁）

ただしこのまま反転させると、学校名の漢字自体が左右逆になってしまうために、いったん消して訳者によって書き直されている。しかし斜め上の角度から見て書かれた文字を再現するのは難しかったのであろうか。英訳では小学校名の漢字が正面から見たままで書かれており、門柱の面とずれている

のがわかる。ここでは校名の読みがコマの下に注のようにアルファベットで書かれており、訳者の苦勞がしのばれる（図10）。



(図10 Gen Vol.1, p.249)

その他、その3コマあとでゲンが原爆を投下するためにやって来た飛行機を見つけて「B29じゃ」「いつのまにきたんじゃ?」というような広島弁も再現することは難しく、原作にはない主語を補って、“It’s a B-29!” “When did it get here?!” という、ごく標準的な英語で訳されている（図11, 12）。



(図11 『ゲン』 1巻、249頁)



(図12 Gen Vol.1, p.249)

もちろん方言で表されている映画のセリフや文学作品を、方言で翻訳するのはよく行われていることである。しかしその場合、両言語の方言に対する十分な知識が必要とされるし、何よりもある方言がその文化圏において、特定のイメージと結びつく可能性があることを考慮すると、方言の翻訳には慎重さが要求される。標準的な言葉で訳された『ゲン』の英訳は、広島弁で語られる原作のローカルでユーモラスな雰囲気の一部失っているとも考えられるが、英語の方言で訳すことで思わぬ属性と関連してしまうことを避ける、一つの方便とも言えるだろう。

2. 海を越えた『ゲン』—アメリカに蒔かれた種

このような苦労を経て全10巻が英訳された『ゲン』は、島根県で水産会社を営むある篤志家が出資し、2006年から2007年にかけて全米約3000の公立図書館に、最初の1, 2巻をセットにしてプロジェクト・ゲンから寄贈された。その後同グループには全米各地からたくさんの礼状が届いている。そのほとんどは受領した図書館からの謝意を示す事務的な文書やほんの短いものであるが、なかには数頁にもわたるかなり長文の感想もあった。それらは皆登場人物たちの過酷な運命を憐れみ、原爆の恐ろしさに驚いたというようなものである。たとえば2013年に同グループに届いた14歳のある少女からの手紙で

は、図書館で偶然この本を見つけ、その後図書館から残りの巻を注文してもらい、2、3カ月かけて全10巻を読んだという。彼女はそれぞれの巻で泣き、笑い、そして最後には怒りと悲しみと希望が入り混じったものを感じたという。そして末尾に「私は、原爆について今自分がどう感じているか、しっかりと理解しました。そして、その問題が話題に上るとき、私はもう臆病で、恥ずかしがり屋ではありません。わたしたちは非難しあうのをやめなければいけません。アメリカは原爆を落とすべきではなかったし、日本はハワイを攻撃すべきではなかったのです。…日本とアメリカは両方とも罪を犯したのです」と記している。こうしてアメリカに蒔かれた『ゲン』の種は、たとえ局所的であったとしても、確実に芽吹いているのである。さて果たしてその種は、ハワイではどのように成長したのだろうか。

3. ハワイにおける『ゲン』の受容

3-1 パロロ本願寺

初めに、同行した元毎日新聞記者の長谷邦彦が以前別の取材で協力を得た、ホノルルのパロロ本願寺に向かった。東本願寺系のこの寺は、1920年にハワイへ到着した森天鸞師によって、モイリイリ地区に設立された。その後何度か移転を繰り返しながらも、現在に至るまでホノルル周辺の日系人コミュニティの中心的存在の一つであり続けている。現在、そこで住職を務める藤森宣明氏は、数年前から『ゲン』の英訳を信徒に貸し出している（図13）。



(図13 パロロ本願寺に置かれている『ゲン』)

そこで初めてこのマンガを読み、衝撃を受けたという人も多い。たとえばその一人 Terry N. Nakamura によれば、学生時代を通じて原爆について詳細に学んだ記憶はなく、このマンガについて聞いたこともなかったという。また彼女の兄は、アメリカが早期に戦争を終結させるために原爆投下を決定したと学んだことは覚えているという。しかし彼女はこのマンガで初めて原爆の本当の恐ろしさを知り、大きなショックを受けたと寺に置かれたノートに感想を綴っている。このように寺院の貸文庫の一部としてこの作品が、あるコミュニティ内で一定の役割を果たしていることは確かである。

3-2 ハワイ大学

次にハワイ大学マノア校アジア研究学部教授の Lonny Carlile 博士と面談した。カーライル博士は比較政治史が専門であり、日本にも留学経験がある。博士は当然『ゲン』を読んでいるし、授業で触れることもあるという。また博士によれば大学で日本や東南アジアについて学ぶ学生であれば、その存在は知っているという。ハワイ大学で最大の図書館、ハミルトン・ライブラリーにも『ゲン』は日本語の原作を含め、英訳版、その他の資料や研究書とともに配架されている。ちなみに図書館の検索欄に“Barefoot Gen”と入力してみると7,614件、“hadashi no gen”で調べてみても218件ヒットする。この数字にはごく短い記事や重複しているものも多く含まれているので精査しなければならないが、州立大学の図書館は学生だけでなく地域の住民にも開かれているので、ここでは比較的容易に誰もが手に届く範囲に『ゲン』は置かれているのである。

3-3 プナホウスクール

そして次に、バラク・オバマ元大統領の出身校でもある、プナホウスクールに向かった。この学校はキリスト教会衆派系の教育施設として1841年に設立され、ホノルル市内に広大な敷地を持つ校舎で幼稚園から高等学校（第12学年）までの一貫教育を行っている、ハワイでは有数の教育機関である。こ

ここで日本語を教えているピーターソン・ひろみ、エイディ淳子両氏と面談した。ちなみにピーターソン氏は、全米で広く使用されている日本語テキスト *Adventures in Japanese* (2007) を編纂している、アメリカの日本語教育界ではよく知られた存在である。両氏とも授業で『ゲン』を使ったことはあるが、原爆の悲惨さを伝えるためにその投下前後のほんの一部を使用しただけで、全体としては扱にくいという印象を持っているという。それは全編に横溢する、原爆を投下した国アメリカに対する呪詛にも似た言葉ゆえにだという。その例は枚挙に暇がないが、たとえば原爆投下直後に死体の処理をしていた日本兵たちが、アメリカ兵の捕虜の死体を見つけるシーンを参照してみよう。ここでは原爆で家族を亡くした老婆が「ばかたれ アメリカのバカたれっ」と怨嗟の言葉を絞り出しながら、その死体に向かって石を投げつける日本兵の行為に加わる (図14)。



(図14 『ゲン』 2巻、37頁)

被爆者たちの率直な感情の発露と思われるこのような場面も、アメリカの

学校教育現場では到底受け入れがたいものとなる。ハワイでは特に様々な民族的バックグラウンドを持つ人が多いため、学校でも特定の人種や民族を非難したりすることがないよう、細心の注意を払わなければならないという。

しかし『ゲン』は一方向的にアメリカを断罪するだけの単純なものではない。たとえば日本人の朝鮮人や中国人に対する差別、戦後の社会を生きる日本人同士の醜い争い、あるいは天皇の戦争責任なども余すことなく描く。当時としては進歩的な考えを持っていたゲンの父親は、強制連行されてきた隣家の朝鮮人とも分け隔てなく付き合い、「朝鮮の人や中国の人みんなと仲よくするんだ それで戦争をふせぐたったひとつの道だ」とゲンに説き、「軍人が政治の権力をにぎると軍国主義のおそろしい世の中になるんだ」と日本の軍国政府を批判する（図15）。



（図15『ゲン』1巻、74頁）

また捕虜となって労働させられている米兵に近所の住民が石を投げる姿を見てゲンの父親は、「あのアメリカ兵にも父や母や兄弟子どもたちがあるだろうに 戦争は人間同士がにくみあい殺しあうだけなんじゃ…」と敵国の兵士をも憐れむ（図16）。



(図16『ゲン』1巻、167頁)

こうした本作のリベラルな平和主義的側面も十分に顧みられるべきであり、悲惨な描写や残酷なシーンだけに目を奪われてはいけないだろう。

3-4 現地新聞

次にハワイのメディア関係取材した。まず1912年に創刊され、現在ハワイ唯一の日刊日本語新聞である『ハワイ報知』の編集局長、金泉典義氏と面談した。氏によればこれまで同紙で『ゲン』が取り上げられたことはないし、ハワイの日系社会でこのマンガについて聞いたこともないという。さらに1977年に創刊された月刊邦字紙である、Hawaii Pacific Press社長の仲嶺和男氏にも面談したが、沖縄出身の同氏はこのマンガ自体を知らないし、日系社会でこの作品が話題になったこともないという。このようにハワイの日系社会全体では、『ゲン』はほとんど認知されていないのである。日本でも『ゲン』はかつての存在感を失いつつあるように思われるが、伊藤の研究(2005)で示されているように、³ それでもまだ日本社会全体ではよく知られた原爆

マンガと言えるだろう。以前ほどではないとしても、日本ではまだ平和教育に利用され、学校の図書館に配架されていることも多いのである。しかしここハワイでは原爆について触れられることは少なく、学校に置かれていることもほとんどないのである。

3-5 一般書店および専門書店

そしてハワイ州最大のショッピングモール、アラモアナ・センター内にある Barnes & Noble Booksellers で『ゲン』を探した。ここは新刊書店としては同州最大であり、日本のマンガコーナーもある。しかし最近英語に翻訳された日本のマンガはかなり並んでいるが、『ゲン』のような古いものは、当然ながら見つけることができなかった。

最後にホノルルのコミック専門書店 Gecko Books & Comics へ向かった。2020年10月に閉店したこの店は、それまでは同種の店舗としてはハワイで最大級のものであった。薄暗い店内には所狭しとコミックやマンガ、その他のグッズが置かれているが、ここでようやく『アキラ』や『ジョジョの奇妙な冒険』、『風の谷のナウシカ』の英訳の間に『ゲン』を見つけることができた(図17)。たまたま1巻は売れていたが、そのほかの2巻から10巻まですべて



(図17 Gecko Books & Comics に置かれていた『ゲン』)

そろっている。店長に話を聞くと、学校で日本について学んでいるのであろう学生が時々買っていくという。彼自身もこれは大事な作品だと考えており、売れるとすぐに入荷するようにしているという。

4 ハワイにおける『ゲン』の広報活動

帰国後、ハワイ州公認の日本語ラジオ放送局、KZOO でアナウンサーをしていた佐野京子氏と面談した。このとき一時的に帰国していた佐野氏は以前、『ゲン』をハワイの学校や図書館に送る活動を行っていたことがある。氏は娘の出産を機に、アメリカが戦争を繰り返していることや、原爆の悲惨さが日本ほどには伝わっていないことが気になり始めたという。また KZOO ラジオで働きだして、広島や沖縄にルーツを持ち、原爆や沖縄戦、空襲、移民などの戦争体験を持つ多くのリスナーたちと出会ったこともきっかけであったらしい。そこで自分に何ができると考えた佐野氏は、10歳のころに『ゲン』を読んで強烈な印象を受けたことを思い出し、2009年に『ゲン』の英語版 *Barefoot Gen* がアメリカの出版社 Last Gasp から全巻出版された際に20セット購入し、この活動を始めた。しかしその時は、前述のプナホウスクールと彼女の娘が通っていた高校を含め、5校にしか受け入れてもらえなかったという。その理由として考えられるのは、まずマンガであることだと佐野氏は言う。寄贈するために見本を持っていっても、大抵は一瞥しただけで断られたそうである。アメリカではマンガは子供向けの娯楽であるという考えが強く、教育の現場にはそぐわないと判断されてしまうということだろう。またたとえ頁を開いたとしても、暴力的なシーンが目についてしまい、それで不適切と断定されてしまう可能性もある。それは日本でも2012年から13年にかけて松江市教育委員会が、「暴力描写が過激」として小中学校での『ゲン』の閲覧を制限したことと通じる。さらに前述したように全編にわたって見られる原爆を投下した国に対する強い恨みの感情も、アメリカの学校では抵抗があるだろう。断られる際の常套句が「マンガはダメ」「政治的なものは受け入れられません」というものであったという。

さらに戦中・戦後の動乱期を舞台にしたこの作品では、古い価値観がそのまま描かれていることも問題である。家庭ではしつけのために親が子を殴り、軍隊では上官が規律のために下官を殴り、学校では教師が教育のために生徒を殴る（図18）。



(図18『ゲン』 1巻、47頁)

こうした当時としては一般的であった家庭内や軍隊、教育現場での暴力や体罰は、日本でも現在はまったく容認しがたいものである。また男性が主導し、女性が付き従うような、男性中心で男尊女卑の固定的ジェンダーロールが当然のこととして描かれるこの作品は、今や日本ですら古い価値観に基づいていると受け止められる。ましてやこうした暴力や男女差別といった問題に特に敏感なアメリカ社会では、到底受け入れがたいものと考えられてしまうのである。

おわりに

明治元年（1868年）に日本からの最初の移民がハワイへ到着して以来、多

くの日本人がこの島へ渡っていった。そして現在ハワイではその子孫たちが様々な分野で活躍している。2021年8月の時点で、日系人は州人口の12.1%を占める。アメリカ全体ではわずか0.4%程度にすぎないのであるから、この割合は際立っている。現在の州知事 David Ige は日系3世であるし、議席数2のハワイ州連邦上院議員の一人は日本生まれの Mazie Hirono である。彼女はアメリカ史上初のアジア系女性連邦上院議員として知られる。また就労人口の約14%が観光関連であるハワイへの渡航者は、全米本土を除くと日本からの者が圧倒的に多い。2019年では2位のカナダ54万人に対し、日本人は158万人である。さらに輸出相手国としても日本は大きな存在であり、貿易総額の14.5%を占めている。2位の韓国7.7%、3位のシンガポール、中国の2.6%と比べると、ハワイにとって日本がいかに重要な位置にあるかがわかる（在ホノルル日本国総領事館ホームページ参照）。

このように日本や日系人との関係においては特別な場所ともいえるハワイにおいて、『ゲン』はいかなる存在と考えるべきであろうか。『週刊少年ジャンプ』にその第1話が1973年に掲載されて以来、日本共産党系の論壇誌『文化評論』や日教組の機関誌『教育評論』などに次々と発表媒体を変えながら、1985年によりやく完結したこの作品を、⁴ 浅妻氏や西多氏らの市民グループがさらに10年近くかけて英訳した。そしてある篤志家の助けを借りて、その英訳が全米各地に届けられる。そこで確実にこの作品を手にとって感動した読者もいたわけであるが、ハワイで『ゲン』を知る者は残念ながら少ないと言わざるを得ない。今回は特にハワイの日系人社会におけるその受容を中心に調査を進めたが、意外なほどに『ゲン』の存在は知られていなかった。現地に住む多くの日系人が、この作品の名前すら聞いたことがないと語るのを聞いて、正直なところ筆者は驚きを禁じ得なかった。

しかしパロロ本願寺のように信徒に『ゲン』を貸し出していたり、大学の図書館や専門書店にこの作品が置かれていたりするのも事実である。またたとえわずかであっても、現地の学校でこのマンガが教材として使われていることも注目すべきであるし、それら教育機関に受け入れてもらおうと奔走し

た人物がいたことは、記憶しておいてもよいだろう。なによりも『はだしのゲン』という作品の翻訳は、英語のみならずそのほとんどが、それを読んで強く心を打たれた人たちのボランティア的活動によってなされている。確かに『ゲン』はすでに「古い」マンガであり、そこでは時代に合わなくなっている価値観や描写も多い。しかしこの作品の持つ本質的な力や理念は、時間や場所を越えて伝播し、今後も様々なところで、たとえ小さくても強烈な印象を残す花を咲かせていくに違いない。

*ハワイの現地調査では、パロロ本願寺住職の藤森宣明氏と信徒の浅井真砂氏に多大なご協力を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

注

- 1 ロジャー・サビン「英米圏における『はだしのゲン』平和運動のコミック、グラフィック・ノベル、そして日本マンガとして」日本マンガ学会編『『はだしのゲン』をめぐる国内外の研究』『マンガ研究』第11巻、2007年、150-173頁。
- 2 ただし現在では日本のマンガのスタイルに慣れている欧米の読者も多く、英訳でも原作と同じように右から左に読むスタイルが定着している。また『ゲン』の英語版において絵を反転させるかどうかは、1コマごとに判断されている。
- 3 伊藤は2005年に広島県広島市と愛知県豊橋市の全小中学校に対して、『ゲン』に関するアンケートを行っている。それによると、『ゲン』は以前のような平和教育における特権的な位置から一平和教材へと、そのポジションをシフトさせているが、それは『ゲン』が学校から消えつつあるということではなく、多様な解釈を持つ一つのマンガ作品として拡散したと考えるべきであるとしている。伊藤遊『『はだしのゲン』の民族誌—学校をめぐる漫画体験の諸相』吉村、福間編『『はだしのゲン』がいた風景』第5章、147-181頁。
- 4 この間の経緯については、福間良明『「原爆マンガ」のメディア史』（吉村、福間編『『はだしのゲン』がいた風景』第1章、10-58頁）に詳しい。

参考文献

- Nakazawa, Keiji. *Barefoot Gen*. Vol.1-10. Last Gasp, 2009.
- Mason, Michele M. "Bodies of Anger: Atomic Survivors in Nakazawa Keiji's Black Series Manga." *Rewriting History in Manga: Stories for the Nation*. Edited by Nissim Otmazgin and Rebecca Suter. Palgrave Macmillan, 2016.
- 河出書房新社編集部編『『はだしのゲン』を読む』河出書房新社、2014年。
- 神田順一「被爆の実相を次世代に伝える—漫画『はだしのゲン』（原作／中沢啓治）をひろめる会の取り組み』『月刊保団連』No.1194、2015年8月、43-46頁。

在ホノルル日本国総領事館「ハワイ州概要」

<https://www.honolulu.us.emb-japan.go.jp/files/100197169.pdf> (accessed 10/18/2021)

高木智子「はだしのゲン 米国にこそ」朝日新聞、2012年2月3日。

中沢啓治『はだしのゲン』第1巻～10巻、汐文社、1975年。

日本マンガ学会編「『はだしのゲン』をめぐる国内外の研究」『マンガ研究』第11巻、2007年。127-173頁。

——「『はだしのゲン』の多面性」『マンガ研究』第22巻、2016年。109-227頁。

バーダマン、ジェームズ M、村田薫編『アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書』ジャパンブック、2005年。

ヘリング、アン、尾田長『物語・はだしのゲン』三友社、1983年。

毎日文化センター広島編『『はだしのゲン』を英語で読む』毎日新聞社、2013年。

吉村和馬、福岡良明編『『はだしのゲン』がいた風景』粹出版、2006年。

ロング、ダニエル、朝日祥之「翻訳と方言—映画の吹き替え翻訳に見られる日米の方言観」『日本語学』18巻3号、1999年。66-77頁。

* 本研究は JSPS 科研費17K02403の助成を受けたものです。